

ようこそ、筑波大学へ

新入生の皆さん、筑波大学への入学おめでとうございます。教職員一同、皆さんを心より歓迎し、お祝い申し上げます。また、ご両親をはじめとするご家族の皆様、関係者の方々にも心よりお祝いを申し上げます。

大学は、学問の自由を尊重し、真理の探究に基づく知の創造を行い、同時にこれを継承する人を育てる場所です。大学は勉強をする場所ではなく、研究を行う場所です。勉強とは、学問や技芸を身につけることであり、それを勉め強いることです。一方、研究とは、物事について深く考え、詳しく調べ、様々な方法を用いて事実や真理を明らかにすることです。言葉どおり、研ぎ澄まし究めることです。そのための学びはもちろん必要です。

大学院での学びには、学士課程と比べて「知の創造」という部分により重みが置かれます。その学びには、問われた問いに答えのない場合が多々あります。それどころか、誰から問いかけられることもなく、自身で問いを見出すことから始めなければならない場合も多いでしょう。それを為せるのは、自身が明らかにしたいことや知りたいことを持っていることと同時に、明らかにしたい、知りたいという強い情熱を持ち続けられるかどうかという点にあります。その上で、知識や情報を集め、論理的で合理的に仮説を構築し、現場に立って調査したり実験を行ったりして検証し、その結果を批判するというサイクルを不断に続けていく必要があります。加えて、自身の将来像を具体的に高いレベルで実現するために、専門力を磨き、挑戦する学問の学問分野における位置づけ、あるいは社会における位置づけを自身の中に確立させる場所です。そのためには、正確に今の社会を見つめ、社会の将来について深く考え、その上でこの大学での活動の意味を認識し、自身の研鑽を進めなければなりません。

皆さんは、そして大学は激動するグローバル社会の中にあります。そこでは国や地域、あるいは個々のコミュニティの境界はなく、それらが成立した時の概念を持ちながらも、明らかに互いに境界を越えた活動を余儀なくされています。今、まさに新型コロナウイルスが驚異的なスピードで世界中に拡がっています。コロンブスが新大陸から新たな感染症を欧州にもたらした頃と比べると、旅する時間、すなわち伝播する時間は2桁以上速くなっています。この感染症は、たちまちのうちに株価に影響を与え、グローバル経済は下方に向かっていきます。市井ではSNSの風評に煽られて、店頭からトイレットペーパーがなくなるという事態まで起きてしまいました。

デジタルトランスフォーメーションが進む社会では、密林の奥地や最果ての地との情報交換も極めて容易になりました。デジタルサイエンスの急激な進歩の裏側では、今ではガラケーなどと呼ばれることもある初期型携帯電話のように、かつては一世を風靡したモノやシステムが姿を消して行きつつあります。職業などについても同様の

ことが起こるのではないのでしょうか？デジタルトランスフォーメーションが進んだ新たな社会を、我が国では **Society 5.0** と表現しています。**Society 1.0** は自然と偶然に生死を委ねるしかなかった狩猟を基盤とした社会であり、**Society 2.0** は計画的な食料調達、すなわち農耕を基盤とした社会です。**Society 3.0** はエネルギー革命とこれによる産業革命が牽引した社会であり、**Society 4.0** は情報を基盤とした社会です。**Society 5.0** はサイバー空間とフィジカル空間を密接に融合させることで、我々のあらゆる活動や社会課題の解決を推進する社会だと考えられています。皆さんはそうした社会において人類と地球の幸せを求めて活動するための準備を本学で整えることとなります。

これから皆さんが学ぶ筑波大学では、そうした準備が整えられるはずです。グローバル化した社会においては、課題もそれを解くための研究もオープン化しています。学問分野の協業に加えて、組織や国を越えた協働が必要です。本学の教育研究における最大の強みは、「学際性」と「国際性」であり、それらこそが、今、社会から求められている人材に必要な能力の基盤となっています。

世の中では、イノベーション創出の時代というような言葉が喧伝されています。イノベーションという言葉は、新しい技術の創出というような意味で用いられることが多いように感じますが、本来は、新しいアイデアから新たな価値を創造し、社会変革に繋げていくことを意味する言葉です。デジタルトランスフォーメーションが予想を超えて進展する時代に、最も必要とされる人材には、真に人が行うべき仕事を見出し、遂行できる能力が求められている、ということ強く意識していただきたいと思います。新たな科学技術を社会に実装するためには、また新たな人間や社会に関する提言を行うにあたっては、自然科学を専門とする者は歴史、地理、文化の理解、また哲学に基づいた法理や心理の観点での議論が必要ですし、一方、人文社会科学を専門とする者は新しい科学技術の進展を熟知することなどがが必要です。社会変革に繋がるイノベーションに関わる者は、視野を広げるよう日々鍛えていかなければなりません。

本学で学ぶ皆さんにはそうした力が身につくはずですが、なぜなら、本学の特徴の一つは、その先進的な「学際性」だからです。本学は、他の大学には類を見ない多くの学問分野を有する研究大学であり、多様な分野が協業する真の意味での総合大学です。本学では、学際性を単なる異分野の協働ではなく、異分野が協業して新たな学問分野を創成することと定義して、教育研究を進めています。本学においては、最先端の研究に裏付けられた授業を通じて、また、研究室あるいはゼミでの鍛錬により、皆さんには高い専門的な力が備わるはずです。また、専門分野のみならず広く他分野の学問にも触れることができるはずです。加えて、様々な学問分野が協力して新たな分野を切り拓く様子も体験することになります。こうした経験は、社会イノベーションを起こす際に必要な、分野を越えた協業を支えてくれるはずです。

本学のもう一つの特徴は、その「国際性」に対する考え方です。本学は我が国においては最も国際的に存在感の大きい大学の一つです。たとえば、本学は留学生比率の高い大学であり、120ヶ国・地域から、2,679名（2019年12月現在）の外国人留学生を受け入れています。また、研究学園都市では数多くの海外からの研究者との出会いもあるはずです。皆さんには、地球の様々な場所で暮らす人たちの考え方、生活、文化を理解し、情報や想いを共有し、連携することができる新たな地球観、すなわち真の「国際性」を身につけることができるはずです。

本学の「国際性」に関わる基本的な精神は筑波大学の源流にまで遡り、その後の歴史の中で丹精されてきたものです。本学の創基は、明治5年（1872年）に、国すなわち時の明治政府によって創設された我が国における最初の高等教育機関である師範学校に遡ります。師範学校は東京高等師範学校などを経て、その後東京教育大学へと受け継がれ、筑波大学は東京教育大学を前身校として昭和48年（1973年）に開学しました。

本学の国際性についての考え方は、東京高等師範学校の校長を23年に亘り務められた嘉納治五郎先生の業績に象徴されています。嘉納先生は、近代柔道の創設者として著名であり、アジアで最初の国際オリンピック委員会の委員となられ、日本にオリンピックの意義を広め、幻とはなりましたが日本に最初のオリンピックを招致した方です。その精神は、今に受け継がれ、一年ほどの延期とはなりましたが、我が国は2度目の夏季オリンピック・パラリンピックの開催を予定しています。

それ以上に重要なことは、嘉納先生は数千人とまで言われる留学生を受け入れるなどの業績を残された優れた教育者であったということです。そのレガシーは、皆さんに受け継がれていくのです。そして、国際化は単に競争の時代から競合と協働のフェーズに入ってきました。グローバル化の先頭に立ってきた欧米では、内向きで孤立主義的な空気がポピュリズムの勢いを得て増してきています。他者との違いを認識した上で、互いに尊敬し認め合うことが強い友情や優れた協働作業を生み出す絆に繋がります。健全な競争と協働こそが未来を築く力です。本学で学ぶ皆さんにはこれらの力が身につくはずです。

冒頭で、大学は知の創造を行う場所であると述べました。真理を探求する基礎的な研究、基礎的な研究を基盤とした応用研究、あるいは社会への実装を進める開発研究など、様々な研究は異なる出口を持っているように思われます。しかし、大学における研究はすべて、新たな発見や発明の上に成り立っていることを強く認識してください。基礎研究では、自身の新たな発見を一般化したり原理化したりする努力が払われます。応用研究は、新たな発見や原理を用いて新たな工夫を生み出す過程であり、工夫が成功すれば同時に発見の正しさが裏付けられていきます。開発研究では、ニーズを理解した上でその要求に応える研究が進められますが、数々の現実的な困難に出会います。その困難を克服するためには、基礎と応用の諸科学に戻って挑戦しなければなりません。

ん。

科学技術を進めるにあたっては、公平であり、公正な態度がなければなりませんし、証拠や証明が必要です。

有名なガリレオ裁判は、科学と宗教の対立という構図の中で語られることが多いと思います。すなわち、2 世紀頃のプトレマイオス以来の天動説に対して、その真っ向からの異論である 15 世紀になってコペルニクスが唱えた地動説は、神の偉大さを否定すると考えるキリスト教、すなわちローマ教皇を頂点とする権威との争いであったという説です。しかし、最近までのこの裁判に関する多くの研究は、ガリレオの初期の支持者はイエズス会の学者であったことも明らかにしています。では、なぜガリレオの説が、その後半世紀ほど後には正しいと広く信じられるようになるにもかかわらず、発表された当時メジャーにならなかったのでしょうか？それは、科学的な証拠と証明が十分ではなかったからではないのでしょうか。たとえば、ガリレオは木星の 4 つの衛星の動きを望遠鏡で観測し、地球が動いている証拠を提示しましたが、空を飛ぶ鳥がなぜ地球の回転から取り残されないのかという疑問には答えられていませんでした。これを説明したのが、ニュートンです。ニュートンは慣性の法則を定式化するとともに万有引力の法則を発見し、地動説を完成に導いたのです。

科学技術を進めるにあたってのもう一つの大切な視点は、大きな視座から考え、行動することです。国連が提唱し、我が国を含め多くの国で発効している「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」すなわち「人間、地球及び繁栄のための行動計画」、いわゆる SDGs が目指すところは世界の平和であり、同時にはその中では「誰ひとり、取り残さず」ということが謳われています。

イノベーションの意味が社会変革であることはすでに述べました。しかし、イノベーションの主な受益者となるはずの多くの人々が、いまだに除外されているということにも気付かなければなりません。すべての人を包摂するという意味でインクルージョンという言葉が使われるようになってきました。1980 年代に、米国の障害児教育分野でこの概念が注目され、日本では障害児が通常学級で学ぶインクルーシブ教育といった使い方がされています。しかし、インクルージョンの語源は、フランスで失業者、障害者など幅広い対象者を含んだ社会的経済的格差を「社会的排除（ソーシャル・エクスクルージョン）」と呼んでいたことに端を発しています。

インクルージョンを達成するのは容易ではありません。科学技術イノベーションが新たなデバイスを生み出しても、動力がなければ役に立ちませんし、一定の教育を受けていなければ十分に役立てることができません。インクルージョンという考え方は、教育分野から発生し、今では組織運営や社会活動においても使われるようになってきました。ダイバーシティは多様な人材を活かすという意味で用いられていますが、インクルージョンはさらにそれぞれの考え方、経験、能力などが他者に認められ、活かされていることを意味しています。その先には、それらの結果として多様多彩なイノベーションが創出されると考えられます。

したがって、インクルージョンを達成するためには、あらゆる分野の知と工夫の動員が必要です。新たな科学技術だけではなく、組織・制度、市場・財政などについても十分な考察と革新が必要であり、それ以上にインクルーシブ・イノベーションに挑戦する者の理解が重要です。大学に関わる者は、大学の使命、すなわち知の創出と継承について、将来に対するしっかりとした展望を持って臨まなければなりません。その成果は、社会にとっては新たな価値の創造と社会の持続性に直結しているからです。

最後になりますが、本学で学ぶ皆さんには、卒業時・修了時には、新しい時代の先駆者として社会を牽引する力を身につけることが期待されます。過去の単純な延長線上に未来を描けない時代に、皆さんは何をなすべきかということについて、深く考え、行動しなければなりません。我が国で最も古い高等教育機関を創基とし、最も新しい国立総合研究大学である筑波大学で学ぶ皆さんは、個人の幸せを超えて追求しなければならないことがあるはずです。教職員は本学の特性を誇りとし、使命感を持って、皆さんを心から応援したいと考えています。皆さんが、本学で幅広い学識と深い専門力を身につけ、やがて世界に飛び出し、ヒトと地球の未来を切り拓く先導者となるためのこれからの努力に期待しています。

令和二年四月吉日

筑波大学長 永田恭介